

IS・Mーインフィニツ
ト・ストラトスーメタ
ルギアにより運命の歯
車が狂った一夏

proto

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※この作品にはIS及びメタルギアソリッドに関するネタバレが含まれています。
現在原作を読んでいる方及びプレイしている方は本作を読まれないことを推奨いたします。

ここはIS、インフィニット・ストラトスの世界。しかし、オリジナルとは少し世界軸がずれた世界。この世界には本来ないはずのゲーム「メタルギア」が存在した。

それにより狂っていく一夏の運命。さあ、彼はどのような生き方をするのか。

目次

第一章 始まり

第一話 始まりの計画 | 1

第二話 ビジョン | 4

第三話 モンド・グロツン | 8

第四話 誘拐 | 12

第五話 初戦闘 | 16

第六話 反応 | 20

第七話 偵察 | 24

第八話 ダンボール | 27

第九話 邂逅 | 30

第十話 尋問 | 33

第十一話 フルトン | 37

第十二話 変革 | 42

第二章 I S 学園

第十三話 I S 学園 | 46

第十四話 誘い | 50

第十五話 バンダナ | 54

第十六話 代表決定戦 | 58

第十七話 代表決定戦決着 | 61

第十八話 理由 | 65

第十九話 会長 | 68

第二十話 水色メガネっ娘 | 72

第二十一話 驚愕 | 75

第二十二話 金属の歯車 | 79

第二十三話 中国代表候補生 | 83

第一章 始まり

第一話 始まりの計画

S3計画。国家を影で支配していた愛国者達という組織によって実施された計画であり、その目的は『発達した現代のデジタル社会において、愛国者達に都合の悪い情報を削除する検閲を行うと同時に、世界中の人間の意志をコントロールするシステム、人々は自分で判断していると思っていることが、実は無意識下で愛国者達に操られている』という世界を作り出すこと。それを実現するために愛国者達が考え出したメソッド（方法）とそれを扱うプロトコル（手順）こそがS3（エススリー）と呼ばれるものだった。これがMGS……ゲームであるメタルギアソリッド内において愛国者達のAIによつて語られた計画の真実だった。

しかし、伝説の英雄と呼ばれた兵士を再現する効率的な方法を演習で立証する【Solid Snake Simulation（ソリッド・スネーク・シミュレーション）】が、この計画をカバーするための偽りの情報として、存在した。

上記のすべてがゲーム内に存在する設定に過ぎない。が、このS3……【Solid Snake Simulation（ソリッド・スネーク・シミュレーション）】に目を

付けた者たちがいた。

彼らはS3計画あらため織斑計画別名プロジェクト・モザイカS3。遺伝子操作によつて最高の人間を作りだす、ここまではかつてプロジェクト・モザイカとして存在した。今回のこの計画は作り出した最高の人間にバーチャル演習を積ませることにより最高の戦闘技術を持つ最高の人間を作り出すことが最終目標となった。

しかし、問題となった点がある。いくら最高の人間を作れたとしても、誕生したての子供に対してバーチャル演習を行つても効果はない。しかし、その間に無駄な知識を得てしまつても仕方がない。そこで1000番目の試作体にして初の成功体のデータを基に、効率よく生産するために作られた個体を何らかの方法で成長させ、Big Bossの過去を睡眠学習という形で追体験させ、Big Bossの経験と知識、戦闘技術を得た状態でバーチャル演習を行った。

それにより組織は目的とした最高の戦闘技術を持つ最高の人間を作り出すことに成功した。が、その彼によつて組織は壊滅した。

「……」までが私が調べうる限りの情報を集め、統合した君の過去。まあ、所々文字化けや情報不足で辻褄がうまく合っていない気がするけど……そこは気にしないでね。」

「ええ、ありがとうございます。」

「どう？自ら閉ざしていた記憶の断片。フラッシュバックしていた自らの過去。その間に新たに形成された人格。記憶は戻ったのかな、いつくん？」

「はい。記憶は取り戻しました。人格は俺の：織斑一夏のままといえるのでしょうか。でもこれだけは確かだと言えるものがあります。俺はBig Bossと同じ経験・知恵・戦闘技術を、そしてソリッド・スネークと同じ経験・知恵・戦闘技術を持っている。しかし、Big Bossともソリッド・スネークとも違う。俺は織斑一夏であると。」
「そう彼は、後に恐るべき子供と呼ばれた彼、織斑一夏の、サマー・スネークの物語である。」

第二話 ビジョン

織斑一夏。織斑計画によって生み出された最高の戦闘技術を持った最高の人間。彼は姉の織斑千冬と二人で暮らしており、姉が働き何とか生計を立てている。

苦しい生活だったが、一夏は家事で姉を支え、二人仲良く暮らしていた。

そんなある日だった。彼の脳裏にあるビジョンが映し出された。それはこの世のものとは思えないものだった。周りは血の池地獄、右手には銃、左腕で15歳ほどの少女を抱えて……否、引きずっていたといったほうが良いか。その人物が鏡を見た。それは、幼少の一夏だった。そこでビジョンは途絶えた。

またビジョンを見た。しかし、今回は違った。何かの施設では無く、森林だった。水面に映る顔は外国人の顔。おそらくアメリカ人。格好は迷彩服だった。そしてビジョンだけでなく、記憶の断面が一夏の頭に流れ込んだ。いや、思い出したと言ったほうが良いだろう。ミッシェルの内容とネイキッド・スネークと言う名を思い出したところで、再びビジョンが途絶えた。さらに、どこかお偉いさんの部屋だろうか。そこでネイキッド・スネークはBig Bossの称号を得る。またビジョンは途絶えた。

そして、次のビジョンも再びアメリカ人のものだった。しかし、今回は施設のビジョ

ンだった。鏡面に映った男の顔は同じものだったが、頭の右上には何かの破片が角のように刺さっていた。それと、纏っている雰囲気違った。そして、聞こえてくる。音源はカセットテープ。声はこの男と同じものだった。しかし、内容は明らかに自身に向けたものではなく、聞いているものに向けたものだった。そして、一夏はこのビジョンが前に見た迷彩服の男……ネイキッド・スネークことBig Bossではなく、彼に扮した影武者で、その名がパニッシュド・ヴェノム・スネークの名と復習の記憶を思い出し、ビジョンは消えた。

最後のものは、再び施設内のものだ。が、自身の体が水に浮いている。そして水面に映っている顔は、今まで見たビジョンの者に似ていたが、確実に違う事は分かった。ビジョンの男の名はソリッド・スネーク。しかし、彼のビジョン……いや、これは……記憶？ 憑依？ とにかく今までのビジョンと違うように感じた。まるで実際に体験したかのようなものだった。その記憶は途切れることはなく、彼のミッションのすべてを、アウターヘブンと呼ばれた武装国家での任務からガンズ・オブ・ザ・パトリオット事件までのすべてを。

彼は自分という存在を疑問に思い、頼れる人物を訪ねた。それが、彼の誕生からの経緯を調べ上げた彼女。天災と呼ばれた天才「篠ノ之 束」だった。

彼女が一夏の経緯を話した瞬間に今まで断片的なビジョンだったものも、すべて思い

出したのだった。

彼、織斑一夏：…いっくんは、東さんが15の時に見つけた。衛星から違法な研究施設を見つけたのでつぶそうと思ったときだった。場所を確認するために再確認すると、衛星からの映像でとんでもないものが見えた。たった一人の少年が組織ごと施設を半壊でこそあつたが破壊したのだ。片手に銃、片腕には女の子を引きずって。

東さんは現場に急行した。その少年に興味が湧いたのだ。

到着した時には二人とも倒れていた。私は二人を自分のラボに連れて帰った。

ラボにつくと彼女：手首についていた「No. 1000」というタグと、少し回収した資料から織斑千冬：ちーちゃんと言う名と、戸籍を与えた。彼女は自分の置かれた環境を理解していた。そこから解放され、見知らぬ世界に解放たれ不安がっていたのは懐かしい。そして、もう一人の男の子。彼は記憶という記憶が失われていた。自分が何者か何が起こり何をして、施設を破壊したのかをも。東さんは彼にも、手首に付いていた「No. S3 | 1」という奇妙なタグだったが1統合で一夏と言う名と、戸籍を与えたのだった。

そしてちーちゃんと話をした。

「ちーちゃんたちの親は他界したことになるよ。いろいろ面倒なこともあると思う

けど、何かあったら束さんに言ってるね。」

「ああ、すまない。恩に着る。」

「まあ、怪しまれないようにいろいろ小細工はしたけど…。大きな犯罪さえ起こさなきゃ大丈夫だと思うよ。これが、ちーちゃんの経歴だよ。」

「何から何まですまない。」

「それで、これからが問題なんだけど。まずはお金だね。無いと絶対に困るもの第1位だからね。それから家だね。どうやら、記憶を書き換えて二人で暮らせようとしたのか謎に家が用意してあるみたいだからそこを使う事にしよう。」

「そ、そうか。」

「お金は、組織の資金が金庫ごと残ってるから、安定するまではそれを使うしかないね。それから……。」「えっと、あつと……。」「束さんのことは下の名前でもいいよ。」

「そ、それじゃあ、束。」

「なにちーちゃん？」

「ありがとう。」

「！……。どういたしまして（ムフーン）！」

いまでも思い出せるし、あれを忘れることはできない。あの時のちーちゃんの笑顔は可愛かった。

第三話 モンド・グロツソ

……時は現在に戻る。

「さて、これからいっくんはどうするのかな？」

「とりあえず空港へ行くよ。そろそろ行かないと飛行機に遅れるから。」

「ああ、モンド・グロツソの観戦に行くんだね。なんなら、東さんが送って行くか？」

「いやあ、不法入国はいろいろとめんどくさいから……、空港までお願いしてもいいかな？」

東が露骨にしよぼんとしたので、空港まで甘えることにした。

空港

「それじゃ、行ってきます。」

「気を付けてね。東さんも衛星経由で応援してるから。」

「それ犯罪なんじゃ……。まあ、楽しんできます。」

……こうして一夏はモンド・グロツソの開催地へと向かった。

…時は進みモンド・グロッソ決勝間近。

姉である織斑千冬は順調に勝ち進み決勝へと進んだ。その決勝が始まる前にと、一夏はトイレに行っていた。用を足し、手を洗ってトイレから出ようとした時だった。

「…!?（外に1, 2……5人か。やるか? いや、やるしかない!）」

何事もなかったかのようにトイレから出る。その直後、右側から警棒を持った黒服Aが突っ込んでくる。一夏は冷静に、腕をつかみ、そのまま背後から現れたもう一人の黒服Bに向けて投げ飛ばす。

「ふむ、もう少しパワーをつけないとな。」

「な、なんだこのガキ。結構手ごわいぞ。」

「か、数ではこつちが上なんだ。ガキ一匹にビビってんじやねえ!」

隠れていた3人が出てきたが、そんなのお構いなしに投げ飛ばした黒服Aから小型のナイフを、その下敷きになっている黒服Bが持っていたハンドガンを奪う。が、その間に囲まれてしまった。黒服3人はアサルトライフルを構えている。

「う、動くなよ。生きたまま連れて来いって言われてんだ。」

「最悪、手足は撃つていいともな。」

「そうか……、お前ら、揃いもそろってバカだな。」

「な、なんだと！」

「セイフティをかけたままだ。それじゃあ脅しにもならんぞ。……ど素人。」

「ど、ど素人だと！俺たちや全員10年以上のベテランだ！」

「そうかい。そりゃ失敬した。」

と言いつつも、セイフティを確認しようと銃口をそらす瞬間を一夏は見逃さなかった。

片手のナイフを右後方の黒服Dへと投げつけ、左後方の黒服C銃口めがけて銃撃、そのまま、まっすぐに進みハンドガンで軽く牽制しながら、CQCで黒服Eを投げ飛ばし、アサルトライフルを強奪、そのまま黒服Eの頭に銃口を突き付けた。

「て、撤退だ。俺たちではこいつには勝てない。」

そう黒服Cが告げると黒服CとDはA、Bを回収、Eを一夏が解放し、撤退していった。

「ふう、さすがに怖いな。……これがBig Boss とソリッド・スネークの経験を睡眠学習とバーチャル演習で得たってんだから怖いもんだよ、科学つてのは。それよりもこれどうしよ。……大会運営に届けるとするか。」

一夏は大会運営本部を目指した。

「すみません、失敗しました。」

「つたく、これだから男は使えない！」

そう言つて目の前の黒服を殴り飛ばしたのはISを纏つた女だった。

「あまりでかい騒ぎにはしたくなかつたけど。まあいい、多少でかくなつたほうが、織斑千冬もおびき出しやすいだろうからね。」

その女はどす黒い笑みを浮かべているのだった。

第四話 誘拐

モンド・グロツソ運営本部に落とし物だと告げ黒服から奪ったライフルを渡した一夏。ちゃっかりハンドガンと小型ナイフはそのまま所持することにした。もちろん日本には持って帰れないのでこの場においての最低限の装備にさせてもらうことにした。またあのようないことが起きないとも限らないからだ。

(そういえば、スネーク達も武器は現地調達だったな。無意識的にそう判断したってことは、これは彼らの経験からか。)

そう考えた一夏だった。

(そろそろ始まる頃だろうか、観客席に戻ろう。)

そう思い歩き出した直後だった。ドゴオオオン！という鈍い音が聞こえ、振り返ると壁が破壊されていた。そして、そこにあつたのはIS だった。

インフィニット・ストラトス、通称IS。強引に和訳するなら無限の成層圏、といったところか。ISは篠ノ之 束によつて宇宙での活動を前提としたマルチフォーム・スーツとして開発された。しかし、開発当初はほかの科学者たちが存在を否定、ただの夢物語、創造の産物、よくできたCGなどという評価しかなかった。そしてあの事件

は起こった。白騎士事件と呼ばれる事件だ。一夏が研究所から脱走した半年後の話だった。日本を射程距離内とするミサイルの配備されたすべての軍事基地のコンピュータが一斉にハッキング、約2400発ものミサイルが日本へ向けて発射された。が、その約半数をIS「白騎士」が迎撃した。その上、それを見た各国が「白騎士」を捕獲もしくは撃破しようと送り込んだ大量の戦闘機や戦闘艦などの軍事兵器の大半を無力化した。この事件での死者は皆無だったが、この事件以降、ISのその驚異的な戦闘能力に関心が高まることになった。

この事件の首謀者が篠ノ之 東であることや搭乗者不明とされている白騎士のパイロットが自身の姉である織斑 千冬であることを、一夏は何となく察していた。

大体そんな大それたことができる人物なんて限られているし、世間的にも知られていないISを扱える人物も限られている。それに、白騎士の動き：特に剣捌きを見たとき、千冬と同じような癖（一夏だからわかる癖であり、言葉に言い表せないもの）を見た。以上のことから一夏は何となく察していたが、追及はしなかった。

過去の振り返りはさておき、現在はIS運用協定：通称アラスカ条約によって、ISの軍事利用を禁止。また、宇宙開発が滞っているため、専らスポーツ目的で使用されることとなった。が、そのISが施設を破壊し、一夏に銃口を向けている。

「貴方が……イチカ オリムラね？」

「言われなくてもそうさせてもらうわ。」
こうして、一夏は誘拐されるのだった。

第五話 初戦闘

一夏がISに連れてこられた場所は廃屋…廃工場のようなものだった。入った瞬間に女が扉にかぎをかけた。

「ふーん、雰囲気はあるな。」

「ま、死にたくなければ動かないことね。クライアントからは誘拐した後は好きにしていって言われてるしね。」

（クライアントがいたのか。まあいい。）それはご忠告……どうもっ!!」

ISに向けてハンドガンを数発撃つ。ただし、乱れ撃つのではなく正確にヘッドを狙う。

「っ!!」

いくらISを纏っていても、顔を狙われれば回避もしくは防衛する。それが人間の本能だからだ。そう予測し、もちろん予測どおり女は防衛した。その間にコンテナ裏に隠れる。

「……ふっ、これは運がいい。……所持品を確認しなかったのは失敗だったな！」

「な、なめた真似を！殺す！殺す！ぜってえ殺す！」

さっきまでのエレガントな言葉遣いからドスのきいた乱暴な言葉遣いに変わる。感じからして、これが本来の言葉遣いのような気がするが、真偽は不明にしておこう。

いつまでもコンテナ裏に隠れているわけにもいかないもので、そこで拾ったモノを持ってコンテナ裏から出る。それと同時に拾ったもの……M4 SOPMODでISに攻撃を仕掛ける。先ほどのIS操縦者との会話は相手を苛立たせることと、ハンドガン……M1911A1オペレーターの残弾数確認とM4に接着剤が詰められていないか、弾は入っているのか、フレームに妙なガタツキがないか、ハイダーの先端がスパイク状かつCCC対応なことを確認していた。

（オペレーターの残段数は6発つてどこか。M4は30発用がフルだな。接着剤……なし、フレームもリジット、妙なガタツキもない。ハイダーはCCC対応だな。まるで仕組まれたように置いてあるけど、やるしかない。）

5. 56mm弾をISにばら撒きながら、コンテナ裏から接近しようとするが、ISの持つブレードがそれを許さない。

「口ほどにもないわねえ！」

「さすがにあのブレードはまずいな。バトルドレスでもあれば行けるんだが……」

CCCを仕掛けようにもブレードを無効化しなければ碌に近づけない。

「だったら、シャドーモセスの時みたい……！」

一夏はあえてハンドガンの弾を打ち尽くした。そして空の弾倉を投げた。音のしたほうをISは向く。条件反射だ。その間に一夏はM4でISを撃ちながら接近する。

「万策尽きたようね！なら、死になさいな！」

ISはブレードを振りおろすが、一夏はローリングでISへと回避しつつ接近、それによりブレードは空を斬る。そのまま、下から背後まで残弾を撃ち尽くす。

「その程度じゃ、シールドエネルギーは削れないわよ！」

「そうだな。だが！シールドエネルギーがどれだけ残つてようが関係ない！」

そういつて一夏はバックから女の首を絞める。

「このまま首を折る！」

「こ、んの…は、離…せ。ガ…キイ…があ！」

ISのマニピュレーターで抵抗されるため結構痛い、ここまでくればもう我慢比べだ。

一夏ももうどれだけ絞めているのかわからない。そのうち、マニピュレーターの力が抜けたので絞めから解放すると、そのまま後ろに倒れ、泡を吹いていたのだった。

「ふう〜。な、何とか倒せたな。しかしIS、さすがの性能といえるだろう。この程度の戦闘技術しかない者でもここまで苦戦するとは。まあ、シールドエネルギーと絶対防御

ありきなんだろうが。もう生身で相手をするのはごめんだ。」

そんなことを呟いていると、閉ざされていたはずの扉が開いた。

「い、一夏あ！無事か！」

「なんで、千冬姉がここに？」

「ドイツ軍からの情報提供でな。一夏が誘拐されたって。」

「え？ドイツ軍？日本政府じゃなくて？」

「あ、ああ。」

「そ、そうなんだ（あの女が言っていたクライアントってのはドイツ軍だったのか？）と
ころで、千冬姉。試合は？」

「棄権した。一夏が誘拐されたんだ、試合に集中できるわけないだろう。」

「そっか。ごめん、千冬姉。せっかくに連覇できたってのに。」

「あやまるな。別に一夏のせいじゃない。ところでお前を誘拐した奴は？」

「え？あ、ああ、そこで伸びてるよ。」

千冬はISを装着したまま泡を吹いている女を目撃する。

「そうか。じゃ、後のことは現地の警察に任せて戻るか。」

「そうだね。」

こうして一夏誘拐事件は幕を閉じた。

第六話 反応

一夏誘拐事件は幕を閉じたと言ったな、あれは嘘だ。

あんなに堂々と施設を破壊し、堂々と誘拐したのだ。しかも、日本代表の唯一の肉親である一夏をだ。情報統制などしきれはるはずもなく、会場に戻った途端マスメディアからの質問攻めが待っていた。

『なぜあなたは誘拐されたのでしょうか？』『一夏さん、今のお気持ちは？』『相手側の要求は何だったんでしょうか？』『なぜ、誘拐犯に自ら付いて行ったのでしょうか？』『生身でI Sを倒していましたが、どのように倒したのでしょうか？』などなど、似たり寄つたりな質問が多かったが答えるべき質問と気になった質問に一夏は答えた。

「まず！誘拐犯の目的はおそらく千冬n…姉の二連覇という偉業を阻止するためだと思います。俺を誘拐した人物も目的までは言わなかったもので、推測にすぎませんが。それにクライアントと言っていましたので、依頼者がいるのでしよう。そして、俺がついていった理由ですが、周りにはたくさんのお客が居ました。その人たちに危害を加えさせないためについていくことにしました。で、質問に質問を返すように申し訳ないのですが、……生身でI Sを倒した？……どこからの情報なんでしょうか？」

『映像が出回っていますよ。……ほら。』

そう言つて記者の一人が一夏に映像を見せる。

『画質こそ悪いですけど、これはあなたですよね?』

「……この件に関してはまだノーコメントでお願いします。」

「すまない。そろそろ帰国準備をしたいのだが。」

『そうですよね。すみません、ありがとうございます。』

千冬の一声でこのインタビューは終わりを告げた。

その後、ホテルに戻つて荷物をまとめ、日本に帰国。帰国後、一夏は東のもとを訪ねた。

「ふむふむ、なるほどね。それじゃあ東さんにまつかせなさ〜い!」

そういつてキーボードとにらめっこが始まったので、一夏は東のラボの片付けを始めた。

あらかた片付け終わり軽食の用意をしていると、「いっく〜ん! わかったよ〜!」と、呼ぶ声が聞こえたので軽食をお盆にのせて、東のもとに向かう。

「えーと、まずは……映像を撮影したのは誰かなんだけど……どうやら監視カメラの映像みたいだね。」

「なるほど。だから画質が悪かったのか。それで?」

「映像は無線で送信されたみたいだね。うーん、かなりの数のダミーサーバーを経由してみたい。たぶんIPアドレスもあてにはならなさそうだね。でもこんな廃工場の監視カメラが生きてるってことは普通に考えたらあり得ないよね。」

「おそらく、クライアントが仕掛けたものでしょう。そして、そのクライアントは…。」

「ドイツ軍、もしくはドイツ政府。」

「やっぱりいっくんも気付いてたんだね。」

「いえ、気付いていたというか…。千冬姉はドイツ軍から俺が誘拐された情報を得ていました。日本政府の役人ではなく、つまり、日本政府が知るよりも早く、それすなわちそれが行われていることを知っている者。それがそこであると怪しんでいただけです。」

「さすがいっくん。予想的中…。…なんだけど、痕跡があるだけで物証がないんだ。」

「それすなわち、やることは一つ。」

「ドイツ軍基地本部及びドイツ政府に潜入調査。」

「ですね。」「だね。」

「そうと決まれば目的地向かいます。」

「ちよつと待ってね。…：…はい、これ。」

東が差し出したのは、一つのバンダナだった。

「これはいつくん専用のISだよ。いつくんは……ISを動かせる。」
「え?」

「本来なら男にコアは反応しないんだけどね。どうやらいつくんにだけは反応するみたいなんだ。その証拠にほら。」

一夏の前に東が球体……ISの心臓部であるコアを差し出す。
「手をかざしてみて。」

無言でコアに手をかざす。すると、コアが儂げな光を放つ。

「うん。やっぱり反応してるね。昔、いつくんが触った時もこんな反応だったな。」
「昔?」

「うん。ここに来たときにたまたま近くにおいてあったコアにいつくんの手が触れて反応したんだよねえ。……おっと思ひ出話に更けている場合じゃないね。さあ、これを頭に巻いてつと。よし!じゃあ、ドイツ軍拠点から潜入しようか!」

こうして一夏のファーストミッションが幕を開ける。

第七話 偵察

○月×日 ドイツ軍本部付近

「こちらスネーク。聞こえるか、東。」

ボイスチェンジャー機能なのか声が渋くなっている。

『はいはい。こちら東さん、聞こえてるよ。』

「待たせたな。潜入地点スニーキングポイントに到着。」

『確認したよ。それじゃあ今回の任務について確認するね。今回の任務はいつく：サマー・スネーク。君を誘拐するように仕向けたクライアントがドイツ軍もしくはドイツ政府であるという物証を得ることだよ。』

「了解した。」

『それから、今回の任務は単独での極秘潜入だから、なるべくばれないようにね。それに伴ってこちらからのサポートは無線でのアドバイスしかできないよ。』

「わかっている。」

『それじゃあ、簡単にだけでもう一度装備の確認をするね。今装備しているのはフルスキン型IS「Snake」だよ。そのISを纏っている間はネイクッドかソリッドのど

ちらかが君の顔になつてゐるよ。今回はソリッドだね。銃はソーコム Mk 23 を麻醉銃として改造したものだよ、サプレッサーも付いてるけど耐久値があるから気を付けてね。それとCQC用の小型ナイフ。それからチャフグレネード数個に携帯用食料のレーションが複数個、双眼鏡が拡張領域パストロットに入つてゐるよ。残りの必要な物、足りなくなつた弾や食料は現地で調達してね。』

「了解。それでは任務を開始する。」

無線通信を終了して、潜入を開始する。

ドイツ軍本部周辺の地形は、一か所を除いて平坦な道だ。唯一付近にある崖から双眼鏡を使って偵察をする。潜入任務において偵察は重要なのだ。

「警備はかなり厳重だな。監視カメラに、歩哨が3人。装備は……エンハンスト・カービンだな。正面からの潜入は難しそうだな。……あのダクト、匍匐すれば行けるか?」

正門こそ厳重だが、横は鉄のフェンスで囲まれてるだけだ。さらにフェンスにはおあつらえ向きの穴が開いている。そこをくぐり、そばに置いてある木箱を登って壁上部にあるダクトを通して潜入できそうだ。双眼鏡で敵の配置、巡回パターンを確認。周囲に敵が来ないことを確認する。崖を早々に降りて、フェンスをくぐる。木箱を登ろうとしたときに、一つ木箱とは材質の違う箱があつたので手に取ってみる。

「お、おお！これは……！」

『いっく……スネーク。何か見つけたの？』

「ああ、ダンボールが置いてあった。」

『え？ダンボールってあの宅配とかで梱包に使われるあの？』

「そうだと。」

『でも、なんでダンボール？』

「……。理屈ではない何かだ。とにかく、ダンボールがあれば潜入も捗るといふものだ。」

『そ、そうなんだ。とにかく、建物内へ潜入してね。』

「ああ。」

スネークは今度こそ木箱を登りダクトへ入って行った。

第八話 ダンボール

ダクト内を進むスネーク。清掃が行き届いていないため埃の量が多く少しせき込みそうになるが、耐える。ダクトを道なりに匍匐で進むと、道が二手に分かれた。

「フム、分かれ道か。」

『いっく……スネーク、どうしたの?』

「今ダクトを進んでいるんだが分かれ道に当たった。右と左どちらに進むのがいいと思う?。」

『うーむ。ねえスネーク、どっちか斜めになっている道はあるかい?』

「ああ、右側が登りだ。」

『だったら、右に行こう。今回の目的は君を誘拐するように仕向けたクライアントがドイツ軍もしくはドイツ政府であるという物証を得ることだ。そんな都合の悪いものは建物の上層部に隠してあるのが定石ってもんだよ。』

「なるほど。では、右に行こう。」

スネークはダクトを右に進んだ。

再び道なりに進む。今すると今度は光が見えてくる。

「出口か。」

ダクト周囲に敵影がないことを確認し、通路に出る。

「どうやら3階のようだな。最上階は4階か。」

通路にあつた案内図で現在地を確認、部屋の位置も確認する。

「……」この階には部隊長室が存在しているようだな。」

部隊長ならこの件について何か知っている者、もしくは関与した者を知っているかもしれない。そう思い部隊長室を目指すことにした。

部隊長室を目指し廊下を進む。角で止まり敵兵が見てないことと出てこないことを確認し、先に進もうとした時だった。一つ奥の角から敵影を確認、スネークは急いで角を曲がった。

「今のは、一体……?」

スネークが隠れる一瞬を見たのは銀髪の少女だった。

少女は左目に眼帯をしていた。彼女がスネークを一瞬だけでも視認できたのには理由がある。越界の瞳ウオーダン・オーシェと呼ばれるISの適合性向上のための処置が施されているからである。人体実験だから本来違法であるなどの詳細な説明は省くが、ISのハイパーセン

サーが疑似的に脳にある、そんなイメージである。それゆえにスネークを一瞬だけだが視認することができた。そして、その越界の瞳がゆえに眼帯をしているのだが、その話はまたの機会としよう。

少女が角を見るとそこに人影はなかった。そこにあつたのは一つのダンボール箱。

「……どこかの部隊の備品だろうか。しかし、こんな通路に……。どこの部隊のものかも不明か。」

少女はダンボールに手を伸ばした。

スネークは祈るほかなかった。少女がダンボールをどかさないうようにと。しかし、少女は手を伸ばした。ぶつくさと独り言を言いながら、箱に手をかけた。無慈悲にも箱が地面から浮いていく。スネークは焦りを感じながらも、一つ妙案を思いついた。それは……。

第九話 邂逅

ダンボールが頭上から離れていく最中、スネークは一つ妙案を思いつき、即座に実行した。

ダンボールと地面の隙間から空の弾倉を少女に股下めがけて投げる。狙い通り、弾倉は少女の股下を通り過ぎその先の壁に当たり音を立てた。少女の意識と視線が壁のほうに向いた。必然的に背中を向けることになるので手に持ったダンボールもそのまま同じ方向に動こうとするので、それに合わせてスネークも体をずらした。

ダンボールがスネークの頭上から消えたのでそのまま立ち上がり、ソーコムを少女の後頭部に突きつけ、「動くな。」とだけ言う。少女は両手を上げ、静止した。

「女、しかも子供に銃を向けるような趣味はないが、急ぎでな。質問に答えてくれれば危害は加えない。俺は織斑一夏誘拐事件のクライアントを探している。そして、ドイツ政府およびドイツ軍が関与しているという情報を得た。どんな些細なことでもいい、何か知らないか？」

「……企てたのはもつと上の連中だ。私は一部隊の部隊長にすぎない。持ち掛けてきたのは亡国機業ファントム・タスクという組織だ。そこまでしか私はわからない。そもそも、たまたま聞こえ

た程度にすぎんのでな。」

「そうか、ありがとう。」

スネークは銃を下した。

「撃たない……のか？」

「言つたろ、女を撃つ趣味はないと。……それより、侵入者を報告しなくていいのか？」
「ここで報告したら、ドイツ軍人の誇りを汚す。軍本部に侵入をゆるした挙句、背後を取られ、見逃されたなんて報告できるわけないだろう。」

「ハハハ、確かに。」

「さあ、行け。」

「あく、名前を聞いてもいいか？」

「……、ドイツ軍所属 I S 配備特殊部隊「シユヴァルツェ・ハーゼ」隊長ラウラ・ボー
デヴィツヒ。階級は大尉だ。」

「俺はスネーク。サマー・スネーク、そして……。」

スネークは、I S を解除した。

「今回の誘拐事件の被害者、織斑一夏だ。」

「!?……。そうか、お前が。だが、何故こんなことをしている？」

「俺は許せない。千冬姉の栄光を、二連覇の偉業を妨げた連中を。そして何より、あの場

で被害なくISを取り押さるという選択ができなかった無力な自分を。」

「ふふつ、面白い男だ。さあ、行け。その手で真実を明らかにして来い！」

「ああ、そうさせてもらう。」

既にISは展開しなおしており、再び潜入任務に戻って行った。

その後……

（織斑一夏、サマー・スネークか。もう会うこともないと思うが、もう一度話をしてみたいとは思ったな。その時は是非手合わせも願いたいものだ。）

と、ラウラに好印象を与えたスネークだった。

第十話 尋問

ラウラ・ボーデヴィツヒ大尉との邂逅直後。上の階への階段を見つけ、フロア移動をする。

「さて、この階にあるのは……参謀本部と司令官室。参謀本部からのほうがよさそうだな。」

参謀本部に足を向ける。

参謀本部前に到着するが、監視カメラがあることに気付いた。

『スネーク、そこには監視カメラがある。チャフグレネードを使う事で監視カメラ：電子機器を無効化できる。でも、自分の使ってるレーザーなんかも無効化されるから注意してね。チャフグレネードが無ければ、実弾銃でも無効化できる。だけどサプレッサーが無いと、音で兵士が来てしまうかもしれないから気を付けて。』

「ああ、わかってる。」

通信を終了し、チャフグレネードを投げる。どうやら滞空時間を重視したプラスチックファイルム式のような。この間に参謀本部のドアを静かに開ける。

(中には兵士が数人、スーツを着たお偉いさんらしき人物が一人。)

一度肉眼で敵兵を確認し、マークィング 気配を識別。

(…………やるか。)

スネークはスモークグレネードを用意、部屋の中に転がす。部屋に煙が充満し、中の兵士たちが混乱したのを見計らい接近。マークィング 気配識別したとおりに、兵士はその位置におり、連続CQCで無力化、お偉いさんの背後に回り込み、拘束。首元にナイフを突きつけ、尋問を開始する。

「声を立てるな。いいか、俺が聞いた質問にのみ答えろ。」

お偉いさんは首を縦に振る。

「織斑一夏誘拐を企てたのは誰だ？」

「そ、それは…………。」

「嘘を吐いたら…………わかってるな？」

「く、企てたのはドイツ軍じゃない！」

「大きな声を出すな。では、ドイツ政府か？」

「い、いや違う。私たちでもない！」

どうやら今尋問しているのはドイツ政府の人間のようなだ。

「なら誰が…………。」

「ふあ、ファントム・タスク 亡国機業だ。そいつらが私たちに持ち掛けてきたんだ。」

「どうやらボーデヴィツヒ大尉の言っていた通りらしい。」

「……フアントム・タスク。……ではそいつらの目的は何だったんだ？」

「さ、さあ。」

「では、その証拠はあるのか？フアントム・タスクとやらが関与したという証拠は。」

「それもない。と、とくに契約書もなかった。あったのは指示書だけだ。」

「では、その指示書は？」

「私たちのはもう破棄した、あるとすれば司令官の物だけだ。」

「そうか。では……フンツ！」

スネークはお偉いさんをそのまま壁へと投げつけた。お偉いさんは気絶した。

スネークはその場で束にコールする。

『証拠は司令官室にあるって感じだね。もしかしたら戦闘になる可能性もある。装備はしっかり整えておいてね。もちろんバレずに入手できれば万々歳だけだね。』

「了解。」

通信を終了する。

参謀本部から廊下に出て、少し離れた司令官室に向かう。

（さて、流石にこの中を偵察するのは骨が折れる。……なにかカモフラージュするため
の物を……。そうだ！）

スネークは一度参謀本部に戻った。

第十一話 フルトン

参謀本部に戻ったスネークは再び司令官室前に戻ってきた。

「この格好なら入っても怪しまれまい。」

スネークは参謀本部で気絶させた兵士から服をぎょうだ……はぎと……拝借したのだ。

3回ほどノックしてドアを開ける。

「失礼しますー!」

堂々と司令官室に潜入……否、侵入した。幸い、部屋の中には誰もいなかった。

「よし、カメラの類も無し。目標物の搜索及び回収任務を開始する。」

司令官用の豪華な机の引き出しを下から順に探してゆく。嚴重にカギのかかった金庫も晩年のBig Bossやヴェノム・スネークが使っていたピッキング技術で難なく開けていく。

「……………む、これか!?……………スコール・ミューゼル、ファントム・タスク亡国機業……………間違いないこれだ。」

すぐに束に無線連絡を行う。

『どうやら、目当ての物を手に入れたみたいだね。』

「ああ、おそらく間違いない。政府のお偉いさんが言つてた司令官側に渡された指示書だ。」

『よし、じゃあ帰還してね。帰還の仕方はフルトン回収だよ。帰還準備ができたなら、腰にフルトン回収装置を装着して、装置を作動させてね。装置のGPSを探知してステルス機で迅速に回収、束さんのラボまで秒で到着するようになってるから。』

「了解した。」

『あ、くれぐれも施設内では作動させないでね。施設外に出てから、人気のない場所で作動させないと、フルトンの気球が敵に割られる可能性がある。もし割られると回収が困難になるからね。』

「ああ、わかつてる。」

無線通信を終了し、司令官室から出る。

下の階に降り、今度は部隊長室を訪れる。再び3回ほどノックし、ドアを開ける。

「失礼します！ラウラ・ボーデヴィツヒ大尉はこちらにありますでしょうか。」

「私に何か用か？」

「お客様が来ておりますので、大尉をお連れしようと。」

「そうか。では、案内を頼む。」

「は！」

こうしてボーデヴィツヒを連れ出した。

しばらく廊下を歩き続ける。

「それで、客人とやらは？」

「……。」

「おい？どうした。」

「この辺なら問題ないだろう。」

「なに!？」

驚いた瞬間に銃を向けられ、即座に両手を上げる。

「おいおい、俺だ。スネーク、織斑一夏だ。」

「なんだお前か。で、こんなところに連れ出して何の真似だ。」

「なに、ちよつとな。俺がここに潜入したことは誰にも言わないでくれ。国際的にまずいことになる。」

「……構わんが、私も条件を出そうか。」

「な、なんだ？」

「お……の、れ……く……き。」

「え？」

「おま……の、れん……くさき。」

「な、なんだって？」

「お前の連絡先をくれ！」

「なんだ、そんなのでいいのか。」

スネークは一枚の紙を渡した。

「俺の無線機の周波数だ。バースト通信だから多分大丈夫だとは思うが……。」

「そ、そうか。」

ボーデヴィッツヒの声が明るく弾んでいるようだった。

「それから、もうひとつ！」

「次はなんだ？」

「もし、また会うことがあれば、次は手合わせ願いたい。」

「……ああ、もちろんだとも！」

「では、私もお前のことは黙っておこう。気が向いたら連絡する。」

「こつちとドイツには8時間ほどの時差があるから、連絡するときはうまく時間を見計らってくれ。」

「ああ、了解した。」

「じゃあ、俺は帰還する。」

「あつー！」

スネークは脇目もふらず、一目散に外へと走りさった。

人目のつかないような場所に移動したスネークはドイツ兵から拝借した軍服を脱ぎ、腰にフルトン回収装置を装着、作動させる。

その後、気球が膨らみスネークを空中へといざなう。その後高速で接近したステルス機がスネークを回収。ホットゾーンから離脱、作戦行動を終了した。

第十二話 変革

ドイツ軍本部潜入任務が終わり、束のラボに戻ってきたスネー……一夏。「ただいま帰還しました。」

「おつかれ、いっくん。今回の任務はドイツ軍もしくはドイツ政府、またはその両方がクライアントである証拠を得ること……だったんだけど。まさか、さらにバックがいたとはね。」

「これは、公表できないな。それに、俺が生身でISを倒したことの弁解のほうも……」「それなんだけど……いっくん、ISを使えることを公表しないかい?」

「え?」

「もちろん今すぐじゃない。高校入学前……IS学園へ入学するんだ。」

「い、いや、ちよつと待つてください。なぜ?なぜ、IS学園に行くんです?」

「真のクライアントが裏の世界の組織だった以上、いっくんが狙われる可能性が高くなる。もし、組織単位での襲撃があった場合、いっくんだけじゃ勝てないかもしれない。でも、IS学園なら各国の代表候補生なんかも集まる。それにちーちゃんもいる。」

「千冬姉が……IS学園に?」

「うん。いっくんが今中一だから……来年から赴任だね。それまではドイツ軍 I S 部隊の特別講師をやるみたいだね。」

I S 部隊と聞き、一夏の頭にボーデヴィツヒ大尉が思い浮かぶ。

「まあ、ドイツ軍側が亡国機業の計画に乗った理由でもあるみたい。誘拐されたいっくんの情報を教えることで、借しを作って部隊を強化させようとしたんだろうね。」
「なるほど。つてか、束さん。随分詳しいですね?」

「アハハ……ごめん、いっくんの携帯見ちゃった。」

と、一夏の携帯を差し出す。一夏はミッシュン中での連絡は無線機で行っていたので、携帯電話は束のラボに置いていたのだ。

「まあ、無防備な状態で置いといた自分が悪いので、一週間デザートなしで許します。」
そう言いながら携帯を受け取り、メールをチェックする。ちなみに、一週間デザートなしで束の顔は(シヨ・ω・ホー・ン)としていた。

「差出人は千冬姉か。……来週からドイツに。」

「うん。で、いっくんはどうする?」

「そうですね。とりあえずメディアにはうまくごまかしましょう。それで……中3の2月に何らかのアクシデントという形で I S を起動させましょう。」

「それがよさそうだね。」

「それで東さん、お願いがあります。」

「ん？なんだい？」

「それは……………」

「うんうん、オツケー！東さんにまかせて！」

「じゃあ、俺はマスコミ向けの言い訳を考えます。」

その後、一夏はマスコミに適当な言い訳をし、なんとなくて納得させた。

そして、2年後の2月。

一夏はI S展示会に来ていた。もちろん先の計画を実行するためだ。

一夏はこの2年間、VR訓練はもちろん、海外へ赴き、紛争地域で腕を磨いた。もちろんただの介入ではない。ネットで依頼を受け、ある程度の報酬を払ってもらい、仕事として戦場で戦っていた。簡易版MSF、もしくはDDといったところだ。もちろんただ戦場で戦うのではなく、亡国機業の情報も集めた。が、なかなか有力な情報は集まらなかった。強いて言えば、亡国機業は実働部隊のメンバーは多くないらしい……………という事ぐらいだ。そっちの世界に詳しい情報屋にじんも……………聞いた情報なので信頼性は高い方だとみていいだろう。まあ、そんな話は置いておいて。今から世界が変わる……………女だけの物だったI Sがそうではなくなるのだ。一夏は転びそうになったという体で、展

示してあったコアを搭載したISにふれ、公にISを起動させた。

第二章 I S 学園

第十三話 I S 学園

一夏が I S を動かしたことは、世界中へ瞬く間に広がり、彼女の耳にも入った。

『……ふむ。では、計画通りだった、というわけか。』

「ああ、俺はフアントム・タスクの襲撃に備え I S 学園で、さらに腕を磨くことにした。」
『なるほど、良い手だ。……決めた、私も I S 学園へ赴こう！』

「は？」

『ムッ！何か文句があるのか？』

「いやそういうわけじゃないが……。」

『ではなんだ？』

「そんな簡単に来れるものなのか？」

『ふふっ。』

「な、なんだその不敵な笑いは。」

『なに、遂に我が黒^{シユヴァアルツェ・ハーゼ} 兎 隊に、第三世代機が配備されることとなった……まあ、まだトリアル段階だな。』

「ふむ、ではその実践データ収集などと言ってこちらに来る気だな？」

『実際そうだしな。まあ、手続き等の問題もあるだろうから、遅れて転入という形になるだろうがな。』

「そうか。では、学園での再会を楽しみにしている。」

『うむ、ではまた』

彼女は……ドイツ軍所属 I S 配備特殊部隊「シユヴァルツェ・ハーゼ」隊長ラウラ・ボーデヴィツヒ。階級は昇進して大尉から少佐になったと聞いた。彼女とはこれまでも無線通信をしていたが、今回はいつになく早くコールが来たのだった。

因みにだが、一夏は無線通信をするときイヤホンをしなくなった。以前束に頼んでいた物のおかげだ。一夏が束に頼んだ物の一つ、それは体内通信を可能とするナノマシンだった。これにより、スムーズな通信と、家事しながらの無線通信時にコードをひっかけなくてよくなったのだった。

一夏が I S を起動させてから 2 か月後。

一夏は教室にいた。しかし、見渡す限り女子女子女子女子。そう、ここは I S 学園。

本来女性しか動かせないISについて学ぶ場所だ。その特性上、必然的に女子高化するのだ。

(……暇だな。ここじゃアレも吸えないしな……。)

そんなことを考えていると、教室のドアが開く。教室には入ってきたのは、明らかに服のサイズがあつていないメガネをかけた先生だった。

「みなさん、入学おめでとうございます。皆さんの副担任の山田真耶です。よろしくお願
いします。」

「よろしくお願います。」

返答したのは一夏だけだった。一人だけでも返答したのがうれしかったのか、山田先生の顔が明るくなる。

「で、では、自己紹介をお願いします。出席番号一番の……。」

(自己紹介か、特に何かあるわけでもないが……。)

「くん……。お……。らくん。……織斑君！」

「え？」

「いまあ「あ」から始まって「お」なんだけど、自己紹介してくれるかな？」

「あ、はい。あー、織斑一夏だ。特にいう事はない。何か質問があれば聞いてくれ。聞いてくれれば答えられる範囲で答えよう。それと、あまり他人の人生に興味を持ったこと

はない。以上だ。」

スネークの記憶や経験からあまり詳しいことは話さないのだった。

第十四話 誘い

軽い自己紹介を終え着席する。その瞬間、頭頂部に危険を察したので、腕を頭上で腕をクロスし防御姿勢を取る。そこに、衝撃が走る。上を向くと、腕に当たっていたのは出席簿だった。

「ほう、今のをガードするか。」

「……、千冬先生か。急に来るからびっくりした。」

「織斑先生……いや、先生と呼んでいるから大目に見よう。しかし、もう少しまともな自己紹介はできんのか？」

「今後付き合っていくんだ、そんな多くを語らなくてもいいだろう。」

「……そうか。」

そう言って、千冬は教卓に向かった。

「私がこのクラスの担任の織斑千冬だ。この一年間でお前たちを使いものになるようにするのが私の仕事だ。返事は「はい！」か「Yes！」だ。いいな？」

「[[[[[[はー]]]]]]」

(こゝは軍隊か……いや、MSFやDDの時もこゝまでではなかったぞ?)

と、記憶にある軍隊を思い浮かべ比較するが、ここまではなかったと感じる一夏だった。

一時間目

授業の内容は至って基本の内容だった。全て束に叩きこまれたので聞く必要もないが、後ろに千冬がいるので寝ようにも寝れない。

「織斑くん、ここままで何かわからないことはありませんか？」

と、山田先生が一夏を気に掛ける。

「ええ、先生の授業はわかりやすいので、問題ありませんよ。」

「そうですか、よかったです。では、続けます。」

と、まあなんとかやりすごした。

休み時間

やることもないので束に現状報告でもしようと、耳の後ろに指を当てようとした時だった。

「すまない、すこしいいか？」

「ん？……お前、箒か？」

「あ、ああ。覚えていてくれたか。」

「そりやな、東さんにも世話になってるし。」

「そ、そうか。」

あまりその名を聞きたくなかったのか返答のトーンが低かった。

「また後……昼休みに食事でもどうだ？」

「そ、そうだな！」

打って変わって声のトーンは上がり、軽めのルンルンで席に戻って行った。箸が戻っていったので束に現状報告でもしようと、再び耳の後ろに指を当てようとした時だった。

「ちよつとよろしくて？」

振り返るとそこには金髪縦巻きロールがいた。

「……なにかようか？」

「ま、まあ！なんですよ、その返事は!？」

「……なんですよって、俺は君のことを知らない。とりあえず、今日の夜一緒に食事でもどうだ？」

「あら？私を誘ってるんですの？」

「まあな。相手を知るにはまずは面と向かって話をすることだと思っている。」

「そ、そうですか……。」

「それに、きつかけはどうあれこんな美女に話しかけてもらったんだ。食事に誘うくらいいいだろう。」

「か、考えておきますわ。」

キーンコーンカーンコーンと鐘がなり、「また来ますわ。」と言って席に戻って行った。
二時間目

教卓に立ったのは山田先生ではなく、千冬だった。

「二時間目の授業の前に決めなくてはならないことがあつてな。クラス代表を決めなくてはならない。自薦他薦は問わん、誰かいないか？」

「はい！私は織斑君がいいと思います！」

「……、はい？」

「私も織斑君がいいと思います！」

「私も！」「私も！」という声がクラス内から上がり続ける。

「ちよ、ちよつと待て！俺は「他薦されたんだ、拒否権はないぞ？」な、なんだと……。」

「……満場一致で織斑できまー！「納得いきませんわ！」ん？」

声が出た方向で立ち上がっていたのはさっきの金髪縦巻きロールだった。

第十五話 バンダナ

クラス代表が織斑一夏になりかけたのだが、そこに待ったをかけた人物がいた。

「納得いきませんわ！」

一夏は声を上げた人物のほうを確認する。それは、先ほどの金髪縦巻きロールだった。

「そうだ！俺も納得いかん！だいたい仕事内容も聞かされぬまま押し付けられるのは面倒だぞ！」

「む、仕事内容を話していなかった……確かにそうだな。クラス代表とは、読んで字のごとくクラスの代表だ。クラス会議での司会進行、クラス対抗戦への出場など。有り体と言えば学級委員長みたいなものだ。これで文句はないな？」

「そうだな。」

「いやいや、無視しないでいただけますか？」

「ん？ああ、オルコットか、なんだ？」

「な、なんだって……。」

自分のペースを作ることに失敗したオルコットは、言葉を出せなかった。

「……………じゃあ、自薦するオルコットと他薦された俺。どちらが相応しいか戦ってみようじゃないか。」

「つ！え、ええ、いいですわよ。受けて立ちますわ。」

「では千冬先生、セッティングを頼む。」

「わかった。だが、機体はどうする？一応政府から専用機の支給が打診されているが？」

「そう言われた一夏は親指で自身のバンダナを指し……」

「専用ISだ。」

と、専用機を既に持っていることを告げる。

「……………そうだったな。では、日程は後日伝える。それまでに準備しておくように。」

「ところで、ハンデはどのくらいつけた方がいいんだ？」

一夏がそう聞くと、クラスメイトは大きな声で笑い始めた。

「お、織斑君、男が強かったのはもう昔の話だよ？」

「それに、今じゃ男と女が戦ったら3日と持たない「それは間違いだ。」え？」

「……………方が一その状況になったでしょう。しかし、普段スポーツの一環として使っているISでいざ人を殺すとなったら、お前たちは躊躇せずに撃てるか？」

「そ、それは…………。」

「それに、我々人類がその局面に達した時、間違いなく人類は滅亡する。それだけは絶対

にあつてはいけない。」

「……………」

「いいか。お前たちが学んでいる物は兵器だ。使い方次第で人を殺すこともできる。しかし、人の命を救うこともできる。しっかりと自分が扱っているものの本質を見て、自身で判断しろ、いいな？」

「織斑の言うとおりだ。いいか、しっかりとISの本質を見つめなおせ。いいな！」

「……………はい！」

(うーむ、やはりMSFやDDもここまでの圧政感はなかったな。)

と、この光景を記憶の中の部下たちと比較する一夏だった。

「では、授業に入る！」

こうして、授業に入った。

授業が終わると、ステルススキル全開で教室から抜け出し、屋上へと向かう。屋上に向かう理由は二つ。一つは専用機に関する質問がドバッと来ることを予測していたからだ。え？いくらステルススキル全開とは言え、あの包囲網をどうやって抜け出したかつて？制服の下にホーネットストライプ迷彩と似た効果を持つクイーンピーストライプ迷彩を仕込んでいたのだ。

それを使い、授業終了直後に蜂を一匹ほど教室に招きこんだ。軽くパニックが起きたタイミングで教室から抜け出したのだ。

もう一つの理由は、束に連絡を取るためだ。IS学園での初戦闘だ。報告しておいた方がいいだろう。と、いう理由で屋上に来たのだ。

体内通信で束にコールする。

『もすもす、たっぱねさんだよおー。』

「俺だ、少し報告がある。」

『……、ふむふむ、なるほどね。それじゃあ、アレを試せるかも！ようやく調整が終わったんだ。支援マーカーを投げてくれれば、ダンボールでお届けするよ。』

ちやうど屋上にいるので一夏は支援マーカーを投げるのだった。

第十六話 代表決定戦

試合当日の放課後

クラスの代表を決める戦いというだけあり、クラスメイトは全員アリーナ観客席に集まっていた。だがそれだけではなかった。一夏が双眼鏡で軽く見渡しただけでも、他クラスや他学年の生徒も見受けられる。

「なんだか、イベントみたいになっているな。」

「なに、軽くひねってくるのだろうか？」

さも当然のように言ってくるのは、もちろん千冬だ。

「まあな。データを確認したところ、彼女の機体は狙撃型のような。同じタイプなら、負ける気はしない。」

「同じタイプだと？……一夏！篠ノ之流はどうした？」

「俺本来の戦い方は、スニーキングだ。そのために必要なスキルである射撃とCQCが剣より秀でるのは当たり前だろう？」

「一夏あー！」

どこからともなく木刀を取り出し、斬りかかって来る。

「はあ、しょーがない。」

だが、左手で箒の腕を掴むと同時にいなし、右手で箒の手首めがけて手刀を放つ。それが決まり、箒の手から木刀が落ちる。

「まったく、いくら東さんの妹とはいえ……。」

「少し、灸をすえてやった方がよさそうだな。つと、その前に……一夏、そろそろ出撃だ。」
「了解。」

そういつて、ISを起動すると同時にダンボールをかぶり、ピットからアリーナに向かった。

アリーナに出た後もダンボールを被り続けていた。

「あ、あなたふざけ！「待たせたなあ！」……はあ？」

ダンボールをスマブ○のように脱ぎ捨てる。オルコットが怒り出しそうになったので、戦闘準備ができていることしつかりとアピールする。

『そ、それでは試合開始！』

アナウンスをしている山田先生も困惑している。が、試合は開始される。

「さあ、踊りなさい！私の奏でる円舞曲で！」

「さあ！ショータイムだ！」

オルコットはスターライトMkIIIIというレーザーライフルを構え、一夏……スネークはPSGIを構える。このPSGIこそ、束が対IS用に調整をし、支援マークでダンボール配達で届いたアレである。

「私相手に狙撃戦を挑もうっていうのです？ 飛んで火にいるなんとやらですわ！」

レーザーがスネークに降り注ぐ。が、全てを紙一重で避けながら、手榴弾を二つ投げる。

「そんなもの！」

オルコットが片方の手榴弾を打ち抜くと、煙が発生する。そして、もう一つの手榴弾がオルコットの周辺で作動する。

「なっ！ ハイパーセンサーが！」

ハイパーセンサーが使えず、煙で敵の姿も見えない。オルコットは困惑した。そして、自身が持つライフルに何か衝撃が走るのだった。

第十七話 代表決定戦決着

スモークグレネードによって発生した煙が晴れる。

オルコットは衝撃が走ったライフルを確認する。それを見たオルコットは驚いた。なんとライフルには穴が開き、煙が上がっているのだ

「な、なぜ私のライフルが……。」

スモークグレネードによって物理視界が、チャフグレネードでセンサーがやられ、一時的にスネークの居場所を見失っていたのだ。しかし、それは向こうだって同じだと思っていた。

「ま、まさか……なるほど、そのような手が……。」

オルコットがスネークを見たとき、納得した。彼が何故あの状況でライフルを正確に打てたのか。その答えは彼の顔に合った。

「……サーマルゴーグル。それでこちらの位置を見ていたのですね。では、私も本気を出して差し上げますわ!」

「お前は一つ、勘違いをしている。」

「え?」

「お前に、俺は、倒せない！」

「な、なんですって！ブルーティアーズ！」

オルコットの機体から、4機のビットが射出され、スネークの周りを浮遊する。

「行きなさいティアーズ！」

浮遊していたティアーズが静止し、スネークにその銃口を向け、レーザーを乱射する。砂煙が舞い、オルコットも観客もスネークの姿をとらえることができない。

ティアーズが銃撃をやめる。もはや勝ちが決まったと言わんばかりにティアーズを回収するオルコット。銃撃による砂煙が晴れる。オルコットだけでなく観客さえもオルコットが勝ったと思っていた。だが……

「狙いは正確だな。だがそれ故、弾道がわかりやすい。」

スネークは盾でレーザーをガードしていたスネークの盾は正面からの攻撃しか防がないが、オルコットの狙いが正確すぎるが故に、防御は簡単だった。

「次は、こっちの番だ。」

PSGIを構え、ティアーズを三機だけ撃ち落とす。残りの一機を回収しようとしているうちに、腰部のミサイル型ブルーティアーズを破壊する。

「なっ！私の奥の手が！」

「情報収集はスニーキングミッションの基本だ。」

そう言いながら、動揺して動きを止めた残りのティアーズを破壊する。

「それに、お前はBT兵器を動かしながら自身が行動することが不可能なようだな。つまり、お前が動揺なりなんなりして体のほうに意識が向けば、ティアーズは止まるってわけだ。」

「くっ！インターセプター！」

スネークは後腰からサバイバルナイフを抜き、右手に装備する。

言い忘れていたが、今回はMGSV：GZの姿で戦闘をしている。じゃあなんでPSG1なのかって？姿はランダムだからきにすんな。

オルコットがナイフを構えて接近してくる。スネークは、右手に持っているナイフを左手でたたき落とし、オルコットの首元にナイフを持ってきながら、地面に叩きつける。投げ方のイメージはMG3の一番最初のオセロット戦で二回目にオセロットを投げたときのような感じだ。その状態でハンドガン突きつける。

「もう降参しろ、お前に勝ち目はない。」

「なぜ、撃たないのですか。」

「この一撃で死ぬことがないとはいえ、丸腰の女を撃つ趣味は持ち合わせていない。」

「そうですか……わかりましたわ、私の負けです。」

『し、試合終了！勝者、織斑一夏！』

こうしてクラス代表決定戦は幕を閉じた。

第十八話 理由

「そんなわけで、クラス代表はセシリアさんになりました。」

クラス代表決定戦の翌日。朝のHRで山田先生がそう告げる。クラスの誰もが勝者である一夏がクラス代表を務めるものだと思っていた。というか、当事者であるオルコットさえそう思っていた。

「い、一体何故なんですか？」

「ん？誰も勝った方がクラス代表なんて言っていないぞ？」

「え？」

「俺はあの時……『じゃあ、自薦するオルコットと他薦された俺。どちらが相応しいか戦ってみようじゃないか。』って言ったんだ。」

「あ、確かに。」

クラスメイト達も思い返し、納得したように頷いていた。

「で、俺は辞退したってわけ。俺はあまり人をまとめるのは得意じゃない（まあ、MSFもDDもまとめてたって言うよりかは、スネークのカリスマに惹かれたって感じだからな）。だから、戦ったうえでオルコットを推薦することにした。」

と、建前を述べているが、本音は単純に面倒くさかったのである。

「それに、一度も飛行せずに代表候補生に勝つたのだ。そんなやつとまともにやりあえるやつなどこの学年にはまず存在しない。」

そう補足したのは織斑千冬だった。

「故に、クラス代表はオルコットになつてもらうことにした。異論はないな？」

「「「「「「はい！」「」「」「」「」」」」」」

「よし、では授業を始める。」

こうして、無事クラス代表が決まった。

昼休み…

「少しよろしいですか？」

食堂へ向かおうとした一夏に話しかけたのはオルコットだった。

「どうしたんだ？」

「いえ、何故辞退されたのか。その本当の理由を聞きたいと思ひまして。」

「本当の理由も何も、人をまとめるのが苦手なのさ。それに、BT兵器の経験を積むためにも良いと思うんだが……。」

「そ、そうでなくてですね！あんな実力があいながら、なぜ辞退したのかを聞きたいので

すわー!」

「……難しい質問だな。何故か……ちよつと失礼。」

携帯を取り出し、通話するそぶりを見せながら教室を出る。が、実際は体内通信だ。

「俺だ、どうした?」

これも言い忘れていたことだが、一夏は体内通信時はスネーク口調になる。

『たつばねさんだよお。いやね、あの金髪がダルがらみしてるみたいだから、いつそのこと本当のこと話しちゃえばって。彼女も代表候補生、亡国機業に狙われる可能性もある。こちら側の事情を教えて、戦力にするのもいいと思うよ。』

「そうか? まあ、どうするかは向こうに委ねるとして。とりあえず話をしてみるか。」

『じゃあ、頑張つてね。』

「ああ。」

体内通信を終え、教室に戻る。

「待たせたな。理由を聞きたいんだったな、ここでは話し辛い。屋上に行こう。」

「わかりましたわ。」

二人は場所を屋上に移すのだった。

第十九話 会長

屋上

「さて、俺がクラス代表を辞退した本当の理由が聞きたい、だったな。」

一夏はオルコットの質問を確認する。

「ええ。」

「あー、先に言っておくが……もしこれを聞いたら後悔するかもしれない。ないか、良かったらぬこと、危ないことに巻き込まれるかもしれない。それでも、聞くか？ その覚悟はいいか？」

「……。はい、かまいませんわ。」

「わかった。……俺はある組織に狙われている。3年ほど前に起きたモンドグロツソ誘拐事件、覚えてるか？」

「ええ。確か……ISに乗った犯人が大勢の目撃者の前であなたを誘拐したと。」

「実はあの時、いろいろ不審な点が多くてな。独自のルートで調べた結果、裏で糸を引いている人物と組織の存在を知った。その組織の名は……。」
フロントム・タスク
「亡国機業」「ええ？」

どこからともなく聞こえたその声は聞きなれないモノだった。

「その組織は、50年以上前……第二次世界大戦中から活動しているわ。裏の世界で暗躍する所謂……秘密結社？」

突如として現れた扇子を持った少女に一夏は警戒、ISの拡張領域内から対人用麻醉銃を腰部に出現させ、即座にホルスターから抜き、銃口を少女に向ける。

「貴様、どこから現れた！そして、なぜそのような情報を持っている！」

銃口を向けられているにも拘わらず、少女の表情は変わらなかった。

「私は更識楯無。この学園の生徒会長にして、学園最強の肩書を持つ者。」

「せ、生徒会長ですの!？」

「生徒会長ね……なら、なぜただの生徒会長がそんな裏の世界の話を何で知っている！」

「そうね、どうせ後で調べるんでしょ？スネークさん？」

「……なぜ、そう呼ぶ？」

「昨日のクラス代表決定試合、見させてもらったわ。その時のあなたの顔、何処かで見覚えのある顔だったのよ。で、調べてみたら……あのMGSってゲームのスネークそっくりだったから。」

（どうやら、俺がドイツで行ったミッションまでは知らないみたいだな。）

「で、なんで裏の世界の話を知っている？」

「……それはね、お姉さんが対暗部用暗部の現当主だから。」

「暗部……国直轄の組織。活動は主に裏側……対暗部つてことは通常よりも上の権限を
持った暗部という事か。」

「そ。だから、いろいろなことを知ってるの。だから、とりあえず銃を下してほしいか
なって。」

やむなく一夏は銃をホルスターに戻した。

「ありがと。で、ファントム・タスクの話だったわね。」

「いや違う。話を元に戻す。そのファントム・タスクにIS学園が、そして俺自身が狙わ
れている事を察知した。IS学園なら代表候補生たちが集まり、防御戦線を張りやす
い。まあ、これは俺がここにいる理由だな。なぜ辞退したかだったな。理由は二つ、本
当に面倒くさかったのと、ファントム・タスクが襲撃を仕掛けるならクラス対抗戦など
イベント時だと推測している。その為、自由に動ける状態でいたい、というのもある。」

「そ、そうなのですね。」

「だから、クラスのこととは頼んだ。オルコット、お前ほどの操縦者なら心配はいらない。」
「わかりましたわ。では、改めて…セシリア・オルコットですわ。セシリアとお呼びくだ
さい。」

「ああ、よろしくセシリア。」

「こうしてオルコット……否、セシリアは学園への脅威を知り、戦いの渦に巻き込まれ

ていくのだった。

第二十話 水色メガネっ娘

クラス代表が決定した日の夕方。

食堂ではセシリアの就任パーティーが行われていた。

「「「「セツシー、クラス代表就任おめでとう！」「」」」」

メタいことではあるが、この世界線のセシリアは日本人やクラスメイトに対し、侮辱するような態度をとったりはしていない。一夏と戦い、内に秘めていた男への偏見が引つ繰り返った、といった具合だ。故に、クラスメイトとの仲は通常よりも良いものとなっている。

「ありがとうございます。このセシリア・オルコット、クラス代表としてしつかりと役目を果たしますわ。」

と、主役の挨拶から宴はスタートした。因みにだが、食堂は布仏本音……通称：のほほんさんがどうやってか貸し切ってくれた。そして、テーブルはオードブルや沢山のデザートで彩られている。ジュースの入ったグラスで乾杯しつつ楽しい時が流れる。

そんな中、一夏へ一つ質問が来た。

「ねえねえ、織斑君。織斑君っていったいどこの部屋にいるの？」

実は俺の部屋の場所はクラスメイトには知られていない。束さんの計らいで寮が改築され、一人部屋（広めのお風呂、システムキッチン、簡易工房付き）を用意してもらえることになり、現在は荷解き中。さらに……

「あー、あんまり言うなつて千冬先生に言われててさ。」

「じゃあ、しょうがないね。」

そんな質問を答えたりしながら、パーティーを楽しんでいると、このパーティーの幹事？を務めているのほほんさんが一夏の元にやってきた。

「いっちゅー、楽しんでる？」

「ん？ああ、楽しんでいるとも。」

「ならよかつたー。あ、そうそう。いっちゅーとね、話したいってこがいるんだけど。いい？」

「ん？ああ、構わない。」

「ありがとー。じゃあ、ちょっと付いて来てくれる？かんちゃん、恥ずかしがり屋さんなのだー。」

一夏は無言で立ち上がると、のほほんさんの案内で一夏と話したいという少女の元まで向かう。

パーティー会場から5分ほど歩いた人気のない廊下。そこにある一室には「IS整備室」の文字があった。その部屋に入ると、何やら黙々と作業をしている少女の姿があった。

「かんちゃん、いつちー連れてきたよ。」

かんちゃんと呼ばれた少女の顔はどこか見覚えがあった。いや、正確に言うると似た顔を見た。

「こ、こんな時間に、こんな場所に来てもらって……ごめん、なさい。」

「気にすることはない。で、俺に何か用か？」

「う、うん。く、クラス代表……決定試合見た。あなたでしょ、スネーク。」

「スネークを知っているのか？」

「え？う、うん。知ってる。」

「名前は？」

「さ、更識、簪。」

そうこれが、更識簪との出会いだった。

第二十一話 驚愕

食堂ではクラス代表決定パーティーが行われていた。が、一夏は整備室で更識簪と会うこととなった。

「さ、更識だつて……。てことは、まさか……。」

一夏の反応に二人は困惑している。

「一つ聞きたいことがある。更識さん「簪でいい。」え？」

「か、簪でいい。名字で呼ばれるのは……あ、あんまり、好きじゃない。」

「そうか。じゃあ、簪。お前、姉はいるか？」

「え？う、うん。いるけど……。」

「もしかしくなくても、更識楯無という名前ではないか？」

「そ、そうだよ。なんで、お姉ちゃんの名前知ってるの？」

「今日の昼休みに接触してきてな。」

「そ、そうなんだ。」

「で、俺に何の用だ？」

「聞きたいことがあって……。クラス代表決定戦？本音と、一緒に見てただけ……。」

な、なんで、ISの形がスネークなのかな?……って。」

「む? なかなか、鋭い質問だな。ちよつと待ってくれ。」

そう言つて一夏は耳元に指を添える。

『あ、いっくん?』

「東か。相談がある。」

『なにに?』

「なぜISがスネークなのかと聞かれたのだが、どう答えるべきだろうか?」

『うーん、ねえいっくん。そもそも、その子なんでスネークだつてわかつたんだろ?』

「さあな。聞いてみるか?」

『じゃあ、ちよつと聞いてみて。』

「わかつた。……、ところで簪、なんでISの形状がスネークだと?」

「そ、それは、自分の好きなゲームのキャラ、だから。」

『なるほどね。……いっくん、めんどくさくならなそうだから、話してもいいかもよ?』

『え?』

『だつて、スネークであることを確信した状態で接触してきたんでしょ? なら、乗つてくれるんじゃない? それに、その子がもし代表候補生なら、戦力も増える。まあ、選択はいっくんに任せるよ。』

「わかった。」

体内通信を終え、簪に向き直る。

「あー、MGSを知ってるなら、少々現実離れたことに聞こえると思うが……。」

一夏は自分の身に起こったことを話した。

「そ、そんなことが……。本当に……。」

「ああ。実際、俺の頭の中にはネイキッドの記憶と、ソリッドのミッション経験がある。

だから……。」

ちよいちよいつと手招きをして、

「生身でもISと戦える。」

と、耳元で囁く。

「そ、そうだよね。シャゴホッドやREXを相手にした記憶と経験があるなら、今更ISなんてね……。」

「ま、何でスネークなのかはわかってもらえたかな?」

「う、うん。あ、ありがとう。」

「用件はそれだけか?」

「あ……。あ、あのね、これを見てほしいの。」

そうやって簪はキーボードを操作した。

「なつ、これは……。」

一夏はそれに対し驚きを隠せなかった。

第二十二話 金属の歯車

「一夏が整備室で簪に見せてもらったもの。それは、REXに……否、どちらかという
とサヘラントロプスに似ているISだった。」

「……メタルギア。」

「や、やっぱりわかる?」

「ああ、間違いない。メタルギアまんまだ。」

「も、もちろん、核は積んでないよ。」

「当たり前だ。しかし、何故メタルギアを……。」

「一夏の問いに少し沈黙した簪だったが、答えは案外早く出たようだ。」

「れ、レックスの開発コンセプト……あ、オタコンに伝えられた方ね。ま、守るための力
といつてもいいと思うんだ。ま、まあ、再現の都合でサヘラントロプスっぽくはなつて
るけど。」

「なるほどな。オタコンが思っていたレックス本来の使い方、攻めるではなく守るため
か。」

「だ、だめ……かな?」

「……いや、いいセンスだ。」

「あ、ありがとう。」

「しかし、なぜこれを俺に?」

「……実はこれ、まだ完成してないの。」

「それはまた、どうして?」

「こ、これ、元は打鉄式式っていう機体だったの。い、一応、日本代表候補生だから。だ、だけど、作ってた倉持重工って企業が作るのを放棄しちゃって……。」

「なんで?」

そう聞くと、ゆっくりと一夏を指さす。

「お、俺か?……、そうか。世界初の男性操縦者が日本から出たから、それに伴い日本企業……日本政府のお膝元とも言える倉持が俺の機体を作らされてもおかしくはない、か。」

「う、うん。さ、察してくれてありがとう。だ、だからね、この機体、私が完成させることにしたの。ち、ちょうど良かったんだ。お姉ちゃんが一人でISを作ったから。わたしも……。」

「確かに一人で挑戦するのも悪いことじゃない。だが、一人の力ではできないこともある。……、彼女は整った設備や素材を一人で調達できるか?更識当主といっても自前の

開発室があるわけではないだろ？」

うんうんと頷く簪。

「だったら、必ず協力してくれた人がいるはずだ。……俺にも、仲間がいた。もちろん実在はしない……だが、彼らは確かにここにいる。」

親指で心臓のあたりをつつく。

「俺はある意味スネークであり、ある意味スネークではない。俺自身、実に曖昧な存在だ。だけど、俺の記憶の中にはあいつらがいる。俺とともに戦った仲間たちが。」

「MSF、DD……」

「それだけじゃあない。オタコンに大佐、メイリンにメリル。それだけじゃあない、君たちが知る物語の登場人物たちは、確かに俺とともに生きた。そして、彼らのサポートがあつて俺がここにいる。もしそれらが存在しなくては俺はここに居ないかもしれない。君だつてそうだ、君のお母さんお父さんが居てようやくここに居る。この時点で俺たちは一人じゃないのさ。……おっと、話しが大分逸れてしまったな。まあ、とにかく一人で無理しすぎるなつてことだ。もし俺を頼りたくなつたら、この周波数にコールしてくれ。秘匿回線だから逆探知等の心配もないだろう。」

「あ、ありがとう。」

「では、ここで失礼する。」

「今日は、ありがとう。また、ね。」

「バイバイなのだ、いっちょ。」

こうして、一夏は簪・本音と別れ、部屋に戻った。

その頃……

「つたく、どこなのよ事務室は！」

ツインテールの少女が一人学園をさまよう。

「……待ってなさいよ、一夏！」

第二十三話 中国代表候補生

クラス代表就任パーティーの翌日HRの前、クラス内は一つの話題……噂で持ち切りだった。その噂とは……

「中国から転校生がくるらしいよ。」「この時期に転校なんて、もしかして代表候補生かな？」

「そうよ！きつとそうね！」

といった、噂と憶測が教室内を飛び交う。一夏はその中で【中国】という単語が頭に残っていた。

(中国か……アイツは元気にしてるのかね)

脳裏に浮かぶのはツインテールの元気な……

「その情報、古いわよ！」

と、大きな音をたたてドアが開く。その先には……

「(そうそうあれくらいのこと……) って！鈴！まさか、鈴なのか!？」

「ええ、久しぶりね一夏。」

今まさに一夏が想像していた人物が現れた。その名を凰鈴音、

「ああ、久しぶりだな。中二で越したから……二年ぶりくらいか。元気そうで何よりだが……、悪いことは言わん、教室に戻ることを勧める。」

「……そうね。じゃあ、また後……お昼にでも！」

「ああ、わかった。」

こうして、鈴は教室へと戻って行った。

昼休み

食堂へ向かおうとする一夏の元に再び鈴が現れた。

「待たせたな。」

「久々に聞いたわ。アンタの待たせたな、本家並みに貫録っていうか雰囲気出るわよね。」

「そう言ってもらえると嬉しいもんだな。」

「さて、とりあえず食堂に行きましょう。積もる話はそれから。」

「そうだな。」

再び食堂に足を向けた。

食堂で一夏はさば味噌定食、鈴は塩ラーメンを頼む。それを受け取り、席を探す。

「あ、いっちく。こっち空いてるよ。」

と、手を……ダボダボの袖を振りながら一夏を呼ぶのは本音。同席しているのは簪だ。

「あー、簪…同席しても構わないか？」

「う、うん。どうぞ。」

誘ってきた本人はともかく、同席している人物の許可（顔見知りとはいえ）を取らないわけにはいかない。が、すんなり承諾してくれたあたり、意外と警戒されてたりというのはなさそうだ。

「ありがとう、お邪魔する。」

お盆を置き、座る。鈴も隣に座る。

「いただきます。」

そういつて、食事を開始する。

「で、いっちくとリンリンはどういった関係なのかな？」

「ん？幼馴染……というには、少々出会いが遅かったな。まあ、小5からの付き合い、旧友だよ。」

「ほえ。」

簪は話を聞いてはいるが、「そんなことより、おうどん食べたい」と言わんばかりにメガネを曇らせながらうどんをすすっている。

「しっかし、アンタも難儀な体質よね。いっつも何かに巻き込まれて。」

「まあ、そういう運命なんだろう。」

「で、あんたはクラス対抗戦には出るの？」

「いや、俺は出ない。」

「あら、さんねん。せっかくアンタとバチバチでやれると思ったのに。」

「悪かったな。対抗戦が終わったら模擬戦でもするか。」

「そうね、そんな時は手加減しないわよ。」

「もちろんだ。」

こうして、二人は火花を散らすのだが、勝負は対抗戦後になるのだった。